

兄が弟に、うちわ作りを記録した映画を見せる、という設定で、劇中劇のようにうちわ作りのプロセスをまとめた作品である。冒頭に登場するうちわで扇ぎながら縁側で涼む兄弟は、馨太郎の弟たち（溶次郎と甲子三郎）である。

うちわ制作の工程は、千葉県房州千倉町のうちわ屋で撮影された。うちわの製作は、秋の彼岸過ぎに「みがき」の工程がはじまり、春の三月一日から「はり」の工程がはじまる、と本作品の字幕において述べているが、本作品の冒頭に示される「5・8・11」(①)は、「昭和五年八月一日」で、おそらく撮影日と見られるため、うちわの出荷が済み、製作を行っていない夏に、一連の工程を順にやってもらい、撮影したものと考えられる。本作品では、うちわの製作過程を知るうえで必要な情報や映像が過不足なく配置され、手元の細かい作業にも可能な限りカメラが迫っている。また、うちわの製作を「映画の中の映画」として見せるなど、シナリオとしても凝った作りになっており、馨太郎の作品中、もっとも完成された映画のひとつと言える作品である。

房州うちわ¹

房総半島の南半分の房州は、江戸時代から竹の産地であり、房州の竹は、江戸で作られていたうちわにも使用されていたという。一八八四（明治一七）年、那古（現館山市内）の岩城庄七が、東京から職工を雇い入れ、うちわの骨の製造を本格的に開始したとされる。一九二一（大正一〇）年頃、東京のうちわ問屋松根屋の横山寅吉が、貼り工程までの一貫生産を房州で試みた。一九二三（大正一二）年、関東大震災で被災した江戸うちわ職人が房州に多数移住し、この地方でのうちわ作りが確立したとされる。昭和初期の最盛期には、年間七〇〇万本ものうちわが生産されていた。

房州うちわは、骨は丸柄、形は丸型が基本である。丸柄特有の工程として、「もみ」「柄づめ」「めひろい（しつけ）」「あぶり」などがある。

内容

一 タイトル

冒頭は、撮影年月日を入れたタイトル(①)と、「第九回東京ベビーシネマ倶楽部 撮影競技大会」への出品作品（実際は第一〇回大会に出品²）であることを示すタイトルから始

まる。

二 縁側で、うちわを片手に涼む兄と弟

縁側で涼む兄弟(写真②)。弟がうちわを見ながら、「兄さん。うちわは、どう作るの!?!」と尋ねると、兄は「うちわのお話かい」と言って、映画フィルムのを見せる。「是は兄さんのお友達の作った映画で、『うちわの出来るまで…』と云うのだ」。兄はそう言うと、フィルムをあげて、リールに巻かれたフィルムを取り出す。「今、借りて来たばかりなんだが、お二階で映写して見せて上げ様う」、兄がそう言うと、弟はうなずいて、ふたり一緒に腰をあげる。映画フィルムが回る映像にオーバーラップするかたちで、メインタイトルが表示される。

三 メインタイトル

冒頭と同じ、撮影年月日入りのタイトル(①)に続き、メインタイトル(③)が表示される。

四 うちわ製作の諸工程

ここからうちわ製作の工程に入る。各工程は、基本的に、はじめに字幕があり、続いて作業する人の全身を含むショットと、作業をする人の手元に寄って撮影したショットとで構成される。いくつかの工程では、作業の結果どのようなになったのか、モノだけを撮影したショットを編集の段階で組み入れて、うちわ製作のプロセスをわかりやすく示している。

〈竹の説明〉「うちわに成る竹は大明竹(俗名本場)或は億我間張等の種類があります」という字幕に続き、うちわに使われる竹を手を持った状態で見せる。大明竹とは大名竹ともいい、女竹の一種である。続いて字幕「此の丸竹は節を境に根の方を二七糎(九寸)、ほ先の方を一五糎(五寸)、に切られます」のあとに、根の方から二七センチ、穂先から一五センチの長さが映像で示される。さらに「是は六百本を一束と云ひ、山から買入れまして、製造にかかります」という字幕が入る。

〈皮むき〉竹についている皮をとる工程。「先づ最初の仕事は皮むき」「此の仕事は秋のお彼岸が済むと、そろそろ始められます」という連続する字幕のあと、男性の全身と手元の二ショットで、皮むきの様子を見せる。

〈みがき〉「次ぎは、みがき」という字幕に続き、^{たらい}盥に入ったもみ殻で竹をみがく女性の映像が、全体とやや寄ったショット、手元の三ショットで構成されている。

〈め切り〉字幕「その次ぎは、め切り」に続いて、竹の節の芽を切り落とす工程が、男性の全身と手元の二ショット、「め切り」後の節の様子を接写したショット(④)で構成

される。

〈竹割り〉うちわの骨になる部分を加工する。字幕「その次ぎは、竹割り」「竹は最初四つに、次ぎに其の一つが各々二つに都合八つに割られます」に続いて、女性が竹を二つ、四つ…と割るところが、女性の全身と手元にやや寄った二ショットで構成される。字幕「八つに割られた竹は更に其の一つ一つが各八つに割られます。でうちはの骨は普通では六十四本と成ります」のち、細かく割る作業を行う手元と、さらに寄ったショット(⑤)の二ショットでわかりやすく撮影している。「竹は逆さに割らないと、節のところまで割る事が出来ないのです」という字幕で、この工程を締めくくる。

〈穴あけ〉編み終えた糸を結ぶ弓を入れる穴をあける工程。「穴あけ」という字幕のみで、詳しい説明はない。男性が舞錐まいぎりで穴をあける様子が、全身(⑥)と手元の二ショットで構成される。

〈もみ〉丸柄のうちわに特有の工程で、六四等分に割いた骨をしごき、編竹の時に糸が切れないように角をとる。字幕「次は、もみ。是は、細く割られた骨を、やはらかくする為に行ひます」に続き、女性が細く割られた骨の部分を両掌にはさみ、掌をこすりあわせるようにして骨をしごく様子が一ショットで記録されている。

〈あみ付け〉糸を骨に編み付けながら、うちわの骨を広げていく工程。字幕は「あみ付け」のみで、映像は、作業をする女性の全身、手元、別の角度からの手元、やや作業が進み骨が広がった状態の手元(⑦)、の四ショットで作業の様子を見せている。

〈弓のすげ付け〉真竹を細く割り、編み終えた糸を結ぶ弓を作って、〈穴あけ〉で作った穴に通す工程。字幕は「次ぎは、弓のすげ付け」のみで、映像は、真竹を細く割る男性の全身と手元、穴に通した弓の形を整える、の三ショットで構成されている。

〈まど〉編み付けられた糸を弓に結びつけ、くし型の部分をつくる工程。字幕「その次ぎは、まど。是は弓に、あみ付けられた糸を結び付けてくし形の部分を作ることです」に続き、作業する男性の手元+さらに手元に寄ったショット、別の角度からの手元のショットでこの工程を見せ、加えて、出来上がったくし形のまどの部分を接写して見せるショット(⑧)が続く。

〈めひろい(しつけ)〉丸柄特有の工程。柄が円形のため、編んだ骨が前後に開いてしまうのを平らにするため、竹ひごを交互に骨に差し込む。字幕「めひろい-しつけ。是で骨が平らに成るように癖をつけます」に続き、作業する女性の手元を角度の異なる二つのショットで見せる。

〈柄づめ〉これも丸柄特有の工程。柄が空洞であるため、湿気で腐ることがないように、柳の枝を詰める。字幕「柄づめ 柄のきりうづめ」に続き、男性が柄を切っている様子が撮影されている。

〈あぶり〉丸柄特有の工程で、あぶって形を定着させる。字幕「あぶり-。竹のくせを直ほします」に続き、女性がうちわを加熱し、まどの部分を手のひらで押さえる、という二つのショットでこの工程を見せる。

〈はり〉骨に紙を貼る工程。字幕「次ぎは、はり」「此の仕事は三月一日から一せいに始められます」のあとに、女性がうちわの骨にのりを付ける、一方の面に紙を貼る、もう一方の面にも紙を貼る (⑨)、うちわの状態を確認する、という映像が続く。

〈すぢ付け〉細めのヘラのようなもので、貼った紙の上から骨に沿ってなぞってゆく。字幕は「すぢ付け」のみ。作業する女性の手元と全身の二つのショットで構成される。

〈なり切り〉余分な骨を断裁する工程。字幕は「なり切り-型切り」のみ。映像は、作業する男性の全身と手元 (⑩)、やや引いた手元、の三ショットで構成される。

〈へり付け〉断裁したところにへりを付ける工程。字幕は「へり付け」のみ。映像は、女性がへりに使用する紙を台に敷く、へりに使用する紙にハケでのりを付ける、うちわのへりに貼っていく、別の角度からやや寄って撮影したショット (⑪)、別の角度からやや引いて撮影したショットから成る。

〈完成品を見せる〉字幕「是で大体うちは出来上がりました」に続いて、うちわを片手に持ち、絵の面を見せる男性の映像。そして、「一本のうちはでも大変な手数がかかつて居るのでから大切に致しませう」という字幕で作品は締めくくられる。

五 タイトル

「終り」というタイトル画面で終了する。このタイトルは、『奥利根の流れ』の最後に使用されているものと同じである。

写真キャプション

- ①はじめのタイトル画面。「5・8・11」は撮影年月日と考えられる。
- ②うちわで扇ぎながら縁側で涼む兄弟。溶次郎（左）と甲子三郎（右）は馨太郎の弟たちである。
- ③メインタイトル画面は兄弟たちの会話の場面のあとに登場する。
- ④竹の節の芽を切り落とす工程に続き、切り落とされたところがどのようになっているか

見せるために、作業現場とは異なる場所でモノだけ接写した映像を挿入し、わかりやすく構成している。

⑤竹割りの工程。八つに割られた竹を、さらに細かく割いている場面。

⑥編み終えた糸を結ぶ弓を取り付ける穴を舞錐であける。

⑦骨に糸を編みつけながら広げていく。

⑧編み終えた糸を弓に結びつけると月形の窓ができる。

⑨骨にのりを塗り、紙を貼る。

⑩紙からはみ出た余分な骨を切り落とす。

⑪うちわの淵にへりを貼り付けていく。

1 房州うちわの歴史・製作工程については、岐阜市歴史博物館編著『日本のうちわ一涼と美の歴史』（岐阜新聞社、二〇〇一、一〇〇頁）、南房総市「南房総いいとこどり 南房総資源辞典 房州うちわの作り方」<https://www.mboso-etoko.jp/dictionary/article.php?flg=2&code=327>（二〇一五年四月一日取得）を参照。

2 第一〇回撮影競技会の本作品についての評に、「この映画は前回競技会に出品する為に作ったものなることは其のヘッド・タイトルに依て明かである」とあり、教育映画という観点から、この作品が一等に推されなかった理由が列挙されている。すなわち、第九回から第一〇回の締め切りまでに五カ月間あったにもかかわらず、修正しないで出品したこと、うちわの製作工程は詳細に示されているが、うちわの製作そのものはあまり教育的価値がなく、国産の材料で製作されたうちわの海外への輸出が年々多くなっていることを数値で示すなどの工夫が欠けていること、そして、最後の教訓を述べるタイトルは、友人がつくった映画の中ではなく、兄弟夕涼みの対座のシーンに戻って入れるほうが効果的であること、などの理由である（『日本パテシネ』第九号、一九三一年四月、六六-六七頁）。